

# 児童養護施設における即興を用いた 音楽ワークショップ・プログラム

研究代表者 桐朋学園大学音楽学部 非常勤講師 大島 路子  
Oshima Michiko

## 研究の要旨

本研究の目的は、児童養護施設における即興演奏を取り入れた音楽ワークショップが、入所児童に及ぼす影響及びそのために必要な創造活動の手順や手法を考察することである。また、併せて音楽家が児童養護施設で活動を行う上での課題についても明らかにする。事例として、リトルクラシック in Kawasakiのメンバーが児童養護施設川崎愛児園において2021年度から実施してきた音楽ワークショップを取り上げる。研究手法として、文献調査の他に、①子どもを対象にした参与観察、②音楽表現とコミュニケーションの関わり、③施設職員を対象にしたインタビュー調査、の3者からの検討を行った。

## 1. はじめに

### 1.1. 研究の背景と目的

音楽を専門分野とする高等教育機関において、演奏や音楽教育に携わる仕事に就くことを卒業後の目標とする学生は多数を占める。一方、オーケストラ等の演奏団体へ入るためのオーディションは年々厳しさを増している。また楽器指導などで収入を得ながら演奏活動との両立を目指す卒業生も多い。しかし、少子化、住宅事情、習い事の多様化により、音楽の個人レッスン需要は限られている。そうした状況において、高等教育で身につけた専門性を活かしたキャリアを構築するには、新たな工夫や着眼点が求められる。

現代社会における音楽活動のあり方について見直し、音楽を媒体として個人やコミュニティのウェルビーイングを追求する社会貢献活動は、今世紀に入ってから世界各国で着目されている。国内においては、体験や双方向コミュニケーションを重視した音楽アウトリーチやワークショップが広がりを見せている。学校や地域の芸術施設が、それぞれの地域性や特性を活かした企画を展開して、広範な対象者を巻き込んでいる。一方、福祉施設等における音楽による社会貢献活動は、その効果が計りにくいこと、手法が分かりにくい（あるいは対象者に関わらず画一的になりがちである）こと、対象者が広範でないことから、音楽家が継続的に取り組むのが難しいのが現状である。音楽を社会にどの様に役立てることが出来るのか、また自身の専門性を活かしながら創意工夫を加え応用する場について、音楽大学を卒業した若手が知ることの意義は大きい。

医療、福祉施設においては、芸術療法の手法も活用されている。近年はアーティストが、高齢者

施設や障がい者施設等の福祉分野で、療法とは異なるアプローチで対象者と共に表現活動を展開する事例が報告されており、またそれらの活動意義や効果に関する研究も蓄積されつつある（吉本2012、長津2018、東京藝術大学2022等）。しかし、福祉施設のうち児童養護施設に関しては、アーティストによる活動を積極的に取り入れている施設は確認できるものの、それらを対象にした事例報告並びに意義や効果に言及した研究は非常に限られている。その中でも、NPO 法人芸術家と子どもたちは、2010年度から複数の児童養護施設に多様なジャンルのアーティストを派遣する事業を展開しており、その活動記録は貴重な資料となっている（NPO 法人芸術家と子どもたち2016、2018、2020、2021）。

以上のような背景のもと、本研究は、児童養護施設における即興演奏を取り入れた音楽ワークショップ（以下、WS）が入所児童に及ぼす影響及びそのために必要な創造活動の手順や手法を考察することを目的とする。併せて音楽家が児童養護施設で活動を行うことの課題について明らかにすることで、若手音楽家に新たな視点での活動手法の道筋を示す。本活動を実践するリトルクラシック in Kawasakiのメンバーは<sup>1</sup>、芸術療法（音楽療法）のアプローチとは一線を画したWSが、児童養護施設に入所している子どもたちの心理的ケアの一助になるのではないかと仮説に基づき、2019年度から川崎市にある児童養護施設川崎愛児園（以下、川崎愛児園）において、表現活動を中心としたWSを継続的に実施してきた。本研究において、WSのどのような部分が子どもたちや児童養護施設の支援に貢献できるのかを考察することで、音楽家と児童養護施設との接続面を捉えたい。

なお、研究手法として、文献調査の他に、①子どもを対象にした参与観察、②音楽家からの視点、③施設職員を対象にしたインタビュー調査の3者からの検討を行った。

## 1.2. 児童養護施設及び入所児童の概要

児童養護施設は、「保護者のない児童（中略）、虐待されている児童、その他環境上養護を要する児童を入所させて、これを養護し、あわせて退所した者に対する相談その他の自立のための援助を行うことを目的とする施設」である（児童福祉法第41条）。国内には612施設あり（2020年現在）、近年はできる限り家庭的な環境で養育できるよう、施設のケア単位の小規模化やグループホーム化等が図られている（こども家庭庁ウェブサイト）。

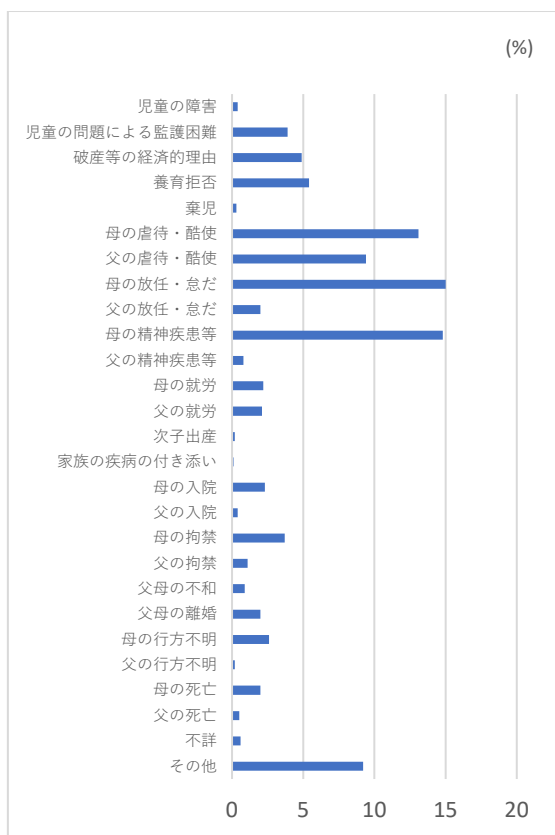


図1 養護問題発生理由別児童の割合

出所:厚生労働省「平成30年度児童養護施設入所児童等調査」を元に筆者作成

厚生労働省（2020）が2018年度に実施した「児童養護施設入所児童等調査」によると、国内の児童養護施設入所児童数は27,026人、近年は里親・ファミリーホーム委託児童数が増加していることで、児童養護施設の入所児童数は減少傾向にある。入所児童の平均年齢は11.5歳、平均の在所期間は5.2年だが、一方で10年以上在所している児童も

全体の14.5%いる。また、先述したように入所児童の36.7%は、広汎性発達障害や注意欠陥多動性障害（ADHD）等の心身の問題を抱えていることが分かっている。児童養護施設に入所した理由については、「虐待」が45.2%と最も高く<sup>ii</sup>、次いで「母親の精神疾患等」が14.8%、「破産等の経済的理由」が4.9%となっている（図1参照）。入所児童と家族との交流については、一時帰宅や面会、電話・メール・手紙を通して交流をもっているケースが多いが、「交流がない」児童も約2割いる（厚生労働省2020）。子どもたちは、多かれ少なかれ親子関係に葛藤を抱えており、自分の親をどう理解して親子関係を捉えていくのか、これから親とどのような関係を築いていけるのか、といった不安と向き合いながら生活している（若松2023）。

## 2. 音楽ワークショップの活動内容

### 2.1. 川崎愛児園の概要

川崎愛児園は、川崎市宮前区に社会福祉法人川崎愛児園によって1977年に設立された。同法人は、児童養護施設（2施設）、地域小規模児童養護施設（5施設）、自立援助ホーム（2施設）、児童家庭支援センター（2センター）を運営し、地域養育の拠点としての役割を果たすべく、家庭的な養育を実施している。また、学齢児の居場所支援を行うなど、地域の子育て世代の支援をすると共に、地域協議会（地域の子育て支援団体で構成される）を年に3回実施してきた。子どもたちが「施設で育った」のではなく「地域の方々に支えられて育った」と感じられる環境をつくり、多様な価値観や社会性を育むことを重視している<sup>iii</sup>。

表1 児童養護施設川崎愛児園の概要

設置主体	社会福祉法人川崎愛児園
施設認可年月日	昭和52年9月1日
設置根拠	児童福祉法41条
施設長	白戸隆
入所数	37名(2023年10月現在)
職員数	52名※(2023年10月現在)

出所：川崎愛児園ホームページを元に筆者作成

※非常勤職員も含める

WSを実施している川崎愛児園では、幼稚園年少から高校3年生までの37名(2023年10月現在)の子どもたちが、男女および年齢ごとに分けられた数人ずつのユニットで生活している(表1参照)。担当保育士、指導員を始めとする職員がシフト制で生活および学習支援を行う中、子どもたちの主体性を育み、意見表明や意思決定の機会を生活の中に位置付けている。また、子ども自身の希望により、スポーツや音楽の習い事に通うことも可能で、それに必要な道具や楽器も購入できる。

本WSは、川崎愛児園で導入されている地域ボランティアによる活動の一つではあるが、その形態は一方向型の学習サポートや楽器等の指導とは一線を画しており、かつ子どもたちと一緒に遊ぶような交流型のボランティアとも異なる、それらの中間にあるものとして位置付けられている<sup>iv</sup>。アーティストと子どもが対等な関係で音楽を楽しみ、その共創のプロセスを重視した活動といえる。

## 2.2. 2021年～2022年度の活動内容

2021年～2022年度はWSを11回実施。リトルクラシック in Kawasaki のメンバー3名(ピアノ、ヴィオラ、サクソフォン)と参与観察者(紙芝居の朗読も担当)1名で実施した(表2参照)。参加児童は小学生5名、事前に担当職員から参加を希望する児童を募ってもらっている。なお、このうち3名が前年度からの継続参加となった。

表2 2021年～2022年度活動概要

音楽家	大類朋美(ピアノ)、大島路子(ヴィオラ)、植川縁(サクソフォン)
参与観察	伊志嶺絵里子(紙芝居、記録も含む)
参加人数	小学生5名(うち前年度から継続3名)
場所	川崎愛児園地域交流スペース
時間	約1時間(B児のみ追加15分)

表3 2021年～2022年度活動内容

日程	ワークショップの内容
第1回 2021/ 11/20	・紙芝居「やまなし」(音楽付き) ・様々な楽器を紹介→紙芝居に好きな音を合わせる→ジャムセッション ・モーツァルト即興バージョンを聴きながら好きなように絵を描く
第2回 12/11	・紙芝居「あてっこどうぶつえん」(音楽付き) →様々な楽器を使ってオノマトペを考える→発表→紙にオノマトペの絵を描く→絵を見せながらオノマトペを発表 ・バルトークの作品を聴いて思ったことを絵に描く
第3回 2022/ 1/15	・紙芝居「ブレーメンの音楽隊」(音楽付き) ・マッキー氏(切り紙作家)がブレーメンに登場する動物を作成 ・マッキー氏に教わりながら子どもたちも切り紙に挑戦
第4回 4/16	・プロコフィエフ<ロミオとジュリエット>演奏 ・紙芝居「ふたりのおじいさん(トルストイ)」(音楽付き)→ディスカッション ・簡単なフレーズを作り演奏できるように練習→発表
第5回 5/14	・ブルッフ<8つの小品>の演奏 ・山本裕氏(ダンサー)の即興ダンスを見ながら子どもたちも音に合わせて即興ダンス→「寝たり起きたり」のダンスをリズムを変えながら挑戦→動物になって動く→動物鬼ごっこ ・裕さんにお礼のお手紙を書く
第6回 6/18	・谷川俊太郎の詩「かっぱ」を使って音やリズムを創作→発表 ・それぞれ河童の絵を描く
第7回 9/23	・山本裕氏(ダンサー)と一緒に音に合わせて体を動かす ・鬼ごっこ ・子どもたちが遊びたいことに音や動きをつけて遊ぶ
第8回 12/3	・ハンドベルを使ってテレパシーゲーム ・松ぼっくりのプレゼント ・音楽ジェスチャーゲーム(「痛い」「怖い」「楽しい」「悲しい」何を表現したのか当ててもらおう)
第9回 2023/ 1/7	・子どもたちのリクエスト(「悲しい感じ」「楽しい感じ」など)に応じて「ミッキーマウスマーチ」の曲想を変化させて楽しむ ・ハンドベルを使って「きらきら星」等を合奏 ・音楽鬼ごっこ
第10回 2/11	・子どもたちがそれぞれ興味のある楽器を用いて「きらきら星」を練習→最終的に音楽家と共に「きらきら星変奏曲」を完成させる ・子どもたちが演奏したい曲を自ら音を探しながら練習 ・音楽に合わせてケンパー遊び
第11回 3/25	・第10回WSで子どもたちがリクエストした曲(「新時代」)を演奏→子どもたちは好きな楽器で即興演奏 ・子どもたちが演奏したい曲を自ら音を探しながら練習 ・フープを使って音楽色鬼ゲーム

※2022年2～3月、7月、8月、10～11月は新型コロナウイルス感染状況に伴い中止

※7/2日、11/6はボランティア協議会に参加

WS は子どもたちとの関係づくりを重視する中で進められた。表3に示した活動内容にある通り、使われた手法は次の種類に大きく分けられる。

- ・ストーリーと音楽の関連性を感じ取り、表現につなげる（第1, 2, 3, 4回）
  - ・音楽に合わせて動き、体と心をほぐす（第5, 7, 9, 11回）
  - ・言葉のリズムを感じる（第6回）
  - ・感情と音楽の関係を知る（第1, 2, 3, 4, 8, 9回）
  - ・協力し合い、達成感を味わう（第8, 9, 10, 11回）
- これらの活動は始めから厳密に目的を設定していたわけではない。WSでは子どもがストーリーの好きな場面を選んで音作りをしたり、興味を持ったことを中心に進めたりする即興性が絶えず求められる。その日の気分合った楽器を手にとって遊び始める、そこに音楽家が即興的に加わるジャムセッションのような形で音楽を楽しむ場面では、より自由な表現が可能である。

第9回では、ある子どもが「きらきら星」が弾けると言って、鍵盤ハーモニカを持ってきた。これをきっかけに、他の子どもたちもそれぞれ好きな楽器（カリンバ、ハンドベルなど）を使って音楽家と個別に「きらきら星」の練習を始めたので、最後は子どもたちだけの合奏につなげた。続いて第10回は、前回同様、子どもたちが好きな楽器を選び自主的に「きらきら星」（必ずしも正確な音やリズムではない）の練習を始めたので、今度は子どもたち5人の思い思いの「きらきら星」をつなげて「きらきら星変奏曲」として音楽家と共に合奏した。

また、音楽以外の手段を併用する試みとして、第3回には切り紙作家のマッキー氏を招いて、紙芝居「プレーメンの音楽隊」に登場する動物を作った。第5回と第7回は、ダンサーの山本裕氏と共に、音楽に合わせた即興ダンスに挑戦などした。音と身体表現を組み合わせることで、新たな自己表現の回路を開拓した。

2.3. 2023年度の活動内容

2023年度はWSを9回実施、実施メンバーは3名（表4参照）。参加児童は前半グループ3名、後半グループ3名（計6名）、このうち4名が前年度からの継続参加となった。

表4 2023年度活動概要

音楽家	大類朋美（ピアノ）、大島路子（ヴィオラ）
参与観察	伊志嶺絵里子（記録・ファシリテーター兼任）
参加人数	前半グループ：小学生3名（うち前年度から継続1名） 後半グループ：小学生3名（うち前年度から継続3名）

場所	川崎愛児園地域交流スペース、共同リビング
時間	前半・後半ともに約45分程度

表5 2023年度活動内容

日程	ワークショップの内容
第1回 2023/ 4/22	・トーンチャイムで子どもたちが何を表現しているか（音楽家が）当てるゲーム ・自分の理想の目覚まし時計の音を作って発表 ・（リクエスト曲）ジブリ「海見える街」で即興演奏
第2回 6/10 前半 後半	・音楽付き紙芝居「お化け屋敷」 ・お化けの音楽を作ろう！ ・音楽を聴きながらフープでケンパー ・「トルコ行進曲」を指揮してみよう！ ・カズーで子どもたちが何を表現しているか（音楽家が）当てるゲーム ・カズー等を使って「新時代」の即興演奏 ・「トルコ行進曲」でフープ鬼ごっこ ・リクエスト曲「翼をください」を指揮する
第3回 7/15 前半 後半	・（リクエスト曲）ロカロカダンスを踊ろう！ ・カズーで「茶色いこびん」を即興演奏 ・ヴァイオリンでおしゃべりしよう！ ・チャイコフスキー「ピアノ協奏曲」を指揮する ・（リクエスト曲）「翼をください」を合奏→録音 ・ヴァイオリンを演奏してみよう！ ・バンド結成相談会
第4回 8/26	・ヴァイオリンの弦を張ってみよう！→「威風堂々」で即興演奏 ・（リクエスト曲）「翼をください」を合奏しよう！ ・（リクエスト曲）「Let it go」で即興演奏 ・「ダンスホール」にリズムを付けよう！
第5回 10/7 前半 後半	・ブラームス「ハンガリー舞曲」を合奏しよう！→録音 ・担当職員さんの音楽を作ろう！→発表 ・（リクエスト曲）「Let it go」で即興演奏 ・（リクエスト曲）「ありがとうの花」を合奏！ ・「翼をください」を合奏しよう！→録音 ・（リクエスト曲）「ダンスホール」を合奏しよう！
第6回 11/25 前半 後半	・音楽付きクリスマスの絵本『クリスマスったらクリスマス』をBくんが読み聞かせ ・「ジングルベル」に合わせて即興演奏 ・「トルコ行進曲」に合わせて即興演奏 ・音楽に合わせて輪投げ遊び→プレゼント ・ブラームス「ハンガリー舞曲」を合奏しよう！ ・ヴァイオリンを演奏してみよう！ ・〇〇が怒るとどんな音になる？ ・音楽に合わせて輪投げ遊び→プレゼント
第7回 12/22	<クリスマス会> ・「ダンスホール」～「もろびとこぞりて」mixバージョン ・ムソルグスキー『展覧会の絵』から「キーウの大門」を合奏しよう！
第8回 2024/ 1/6 前半 後半	・ムソルグスキー『展覧会の絵』から「キーウの大門」を即興演奏 ・（リクエスト曲）「ダンスホール」を即興演奏 ・目を回しながらベルを鳴らそう！ ・ムソルグスキー『展覧会の絵』から「キーウの大門」を即興演奏 ・（リクエスト）絶叫ごっこ ・（リクエスト曲）「ダンスホール」を合奏しよう ・目を回しながらベルを鳴らそう！
第9回 3/23	(2024年2月末時点において未実施)



※5月、9月、2月は新型コロナウイルス感染状況に伴い中止  
 ※11/25はボランティア協議会に参加

WSは子どもたちの主体性を重視する中で進められた。表5に示した活動内容にある通り、使われた手法は次の種類に大きく分けられる。

- ・音楽家と子どもたちの関係性を構築(第1,2回)
- ・自己を表現する(第1,2前半,3,4回)
- ・音楽に合わせて動き、体と心をほぐす(第2,3前半,6,8回)
- ・感情表現としての音楽を知る(第5前半,6後半回)
- ・楽器体験(ヴァイオリン)(第3,4,6後半回)
- ・お互いに協力し合い、達成感を味わう(第1,3後半,4,5,6,7,8回)

2023年度は、新たに2名の参加者が加わったことで、第1回、2回は再び子どもたちとの関係性構築に重点を置いた。特に、子どもたちと音楽家との間に「教える／教えられる」という垂直な関係を作らないよう、子どもたちが何を表現しているのか音楽家側が当てるゲームを頻繁に採用し、水平な関係性づくりに注力した。

また、2021～2022年度のアクティビティのように紙芝居などストーリーから連想した音や音楽だけではなく、「自分の理想の目覚まし時計の音楽を作る」など、視覚に頼らない形で音楽表現をするアクティビティも取り入れた。更に、第5回、第6回では、子どもの担当職員をイメージした音楽づくりや、担当職員、学校の先生、我々音楽家のメンバーが怒るとどんな音がするか?といった、子どもたちの主観的感情を音で表現するアクティビティに繋げていった。自分の気持ちを言語化することが不得手な子どもが多い中で、非言語的手段を用いて感情表現をする試みでもあった。

2023年度は、WSは、子どもの主体性をより一層重視した結果、子どもたちから挙がったリクエスト曲も頻繁にアクティビティに取り入れた。第3回では、リクエスト曲「翼をください」を子どもたちと音楽家で合奏したが、練習当初は即興演奏ではなく、あらかじめ音楽家が用意していた楽譜やリズムをなぞる形で行った。しかし、第5回になると、子どもたちが曲想に合わせて自由に即興演奏を取り入れるようになり、部分的ではあるが創造活動にも繋がった。

愛児園のクリスマス会が行われた第7回では、基本的にリトルクラシック in Kawasaki の出し物として演奏したが、共演を希望したA児も参加し即興でハーモニックパイプとベルを鳴らしてくれた。また、ムソルグスキーの《展覧会の絵》から「キーウの大門」を演奏した際は、入所児童全員にシェイカーを配布。ロシアとの戦闘の長期化

により苦境に立たされているウクライナの人々にエールを送るという趣旨で、曲の終盤から力いっぱい楽器を鳴らしてもらった。この入所児童全員を対象にしたアクティビティは、日頃企業や地域のボランティア等様々なサポートを受け生活している子どもたちが、逆に誰かをサポートする側にもなれるという意味合いを込めたものであった。

### 3. 参与観察、音楽家からの視点、インタビュー調査結果

#### 3-1. 参与観察

参与観察者(伊志嶺)は、「紙芝居等を読んでくれるサポーター兼ファシリテーター(一部)」としてWSに参加しながら、子どもたちの変化を捉えることを目的に、2021年11月から2024年3月まで参与観察を行った。また、WS中の様子は各回録音し記録をとった。本レポートでは、その記録も活用し、特にA児とB児の活動の様子とその変化の一部を報告する。倫理的配慮として、事前に施設側に観察内容及び録音の許可をもらい開始した。また、ボイスレコーダーは可能な限り子どもたちの視界に入らないよう配慮した。

なお、2021年度第1回WS終了後、心理社会的問題をもつ子どものスクリーニングを目的とした質問紙(Pediatric Symptom Checklist日本語版)<sup>4</sup>を子どもの担当職員に配布、子どもの性質や状態について回答してもらっている。質問紙の結果については、A児、B児共に、スクリーニング陽性(A児:20点、B児26点)、すなわち「心理社会的問題がある」という判定になった。個人情報保護の観点により、職員から子どもたちの養護発生理理由や虐待の有無に関する情報は(直接的には)開示されていない。

#### (1) A児(小学生・高学年)について

A児は、前述した質問紙によると、「そわそわしてじっとしてられない」、「気が散り易い」、「イライラしたり怒ったりする」、「一つのことに集中できない」、「自分を卑下する」という項目が「しばしばある」という結果だった。担当職員からは、「常に自分に自信がなく、『できないもん』が口癖である」と事前に聞いていた。

WS中は、音楽家が「楽器鳴らしてみる?」等を提案しても、「ダメ」「できないもん」という拒絶反応が比較的攻撃的な形で出てきやすかったり、気に入らないことがあると扉の外に隠れてしまったりする様子が度々観察された。一方で、このA児は毎回WS終了後、誰よりも最後まで部屋に居残り名残惜しそうにしている様子も見られたこ

とから、WSの時間に何らかの心地良さを感じていることも分かった。

互いに協力し合ったり目標を見据えたようなアクティビティに対する拒絶反応が特に強いことから、WSの工夫として、A児の言動に寄り添いながら個別に対応し、自由にリズム作りや音作りをする時間を設けた。また、A児が自由に鉄琴を鳴らしている横で、音楽家が即興で音楽を重ね合わせたところ、パッと得意げな表情に変わり、その後A児も一生懸命演奏し続ける場面が見られた。

また、A児は一度気に入らないことが起こると、ファシリテーターを叩いたり暴言を吐いたりなど、WSの最後まで気持ちを切り替えることが出来ない場面が多かったが、自分の好きな音楽が聞こえてくると、「あ！」と言ってピアノに近づき、心落ち着いた様子でじっと耳を傾けていた。自分の好きな音楽に触れることで、ものごとに関する認識が変わり、凝り固まった気持ちが徐々に溶けていく様子が観察された。

一方、集団で取り組むアクティビティについては、「やらない！」と最初は強く反発していても、自分より低年齢の子どもが挑戦していたり、正解を求められない形、心理的安全性が確認できると、「やっぱりやってみようかな」と意欲をもったり、周囲から自分の表現が肯定的に受け止められることで自信を獲得する様子も確認できた。

## (2) B児（小学生・高学年）について

質問紙では、「気が散り易い」、「悲しい、幸せではないと思う」、「自分を卑下する」、「以前と比べて担当職員と一緒にいたがる」、「気持ちを表さない」、「都合の悪いことを人のせいにする」という項目が「しばしばある」という結果だった。担当職員からは、「斜に構えたところがある一方で、人懐っこい部分もあり、他を巻き込む力はある」ということだった。

WS中は、音楽に合わせてリズム感よくタンバリン等の楽器を自由に演奏したりして楽しんでいる様子だったが、2021年度第3回目のWS以降から、WSの始めにピアノの後ろに隠れたり寝たふりをしたりするようになり、音楽家や参与観察者がどこまで自分を受け入れるのか試すような行動（試し行動）を取るようになった。

WSの工夫として、施設の地域コーディネーターのアドバイスもあり、B児だけを対象にした個別WSを、全体のWS開始15分前から設けた。個別WSでは、B児が持っているギターを活用しながら、音楽を介した信頼関係の構築に努めた。また、集団で協力し合うアクティビティを取り入れた際は、最年長のB児にリーダーシップを発揮しても

らったり、B児自身のアイデアをアクティビティに取り入れるようにした。WS終了後は、B児に直接「リーダーシップを発揮してくれて、すごく助かったよ。ありがとう」といった声掛けを行うようにすると、最初は「そんなこと知らない」といった素振りを見せていたが、よく話しているうちにB児自身もリーダーシップを発揮した部分で自己を肯定的に捉えていること、また同時に小さな達成感を感じていることが分かった。2022年第8回以降、前述したようなB児の試し行動は完全になくなり、積極的にWSを楽しんでいる様子が確認できた。

更に、B児のリズム感の良さに着目し、2023年度から電子ドラムを購入。B児が参加している後半グループでは、ファシリテーターより「バンドを結成するのはどうだろうか」と提案し、B児は前向きに受け入れていた。子ども達のリクエスト曲を中心に合奏練習を始めたが、B児のリクエスト曲「ダンスホール」では、B児は「時間のある限り練習したい」と非常に積極的に参加していた。また、ある程度基本的なリズムが叩けるようになると、自ら即興でリズムをアレンジして楽しんでいる様子も確認できた。

以上、即興演奏を活用したことは、子どもたちの自発的な言動を起点にアクティビティの内容を自在に変更できる点でWS自体に柔軟性をもたらす効果が認められた。また、即興演奏を活用したり、個別及び集団の双方のアクティビティを設けるなど、失敗や間違いのない受容的な雰囲気を作ることで、A児に安心感や意欲が生まれ、B児からは更なる即興的なアイデアや主体性が引き出された。そして子どもたちのそのような小さな変容や反応を丁寧に拾いあげ、勇気付け、褒めてあげる等の声掛けや関わりを通して、子どもたちが小さな自信や達成感を獲得している様子が確認された。

## 3.2. 音楽家からの視点

本節では、WSを実践した音楽家（大島・大類）の視点から、本活動の意義について述べる。第一に、本WSによって子どもの自由な自己表現の場を創出できることが挙げられる。WS中の混沌としたやり取りの中でも、自由に音を出すことや、音楽を聴いた後に描いた絵などで表現するという行為そのものに意義を見出すことができた。すなわち、たとえ負の感情であっても、自分の外に出すことで、それがコミュニケーションの契機になったからである。本活動では、個別と集団で取り組むアクティビティの双方をWSに取り入れることで自己表現の場を確保することができた。第二に、子どもの個性の発見に繋がる点が挙げられる。

子どもたちの WS 中に見られる表情や言動には、付き添う職員が驚くような想定外の場面も見られた。施設職員に子どもたちの新たな側面を知ってもらおうという点でも、本 WS は貢献できることがわかった。

一方、音楽家にとっても、本活動の実践を通じて自身の活動の幅が広がっている。本 WS では、子どもたちの意思を尊重しつつも、音楽表現を介したコミュニケーションを図ることが困難な場面がある。音楽家は常に即応力が求められると同時に、素材を工夫し、時にはストーリーや視覚的補助を用いて音楽と結び付けながら、子どもたちと共に表現の方法を模索している。このような中で、自分の気持ちと表現が重なり合った瞬間の楽しさを共有することは、コミュニケーションを大前提とする音楽家としての活動の広がりにつながった。音楽家メンバーは、この活動で培った即興演奏の経験を活かし、2021 年度以降、即興演奏を中心とした一般向けコンサートを計 3 回実施している。また有識者インタビュー（2023 年 5 月 27 日実施）にてカールスト・デ・ヨングより、単純な素材を用いて発展させていく手法、枠組みを設けることでむしろ広がる創造性についても多くの知見を得ることができた。

今後の活動において若手音楽家が関わる場合には、次の二点の資質が求められると考える。第一に、まず何よりも子どもとの信頼関係を優先してコミュニケーションをとろうという姿勢が大切になる。時折みられる気乗りしない態度や、更には拒絶や暴力的とも取れる言葉を、子どもが本当に意図するところやその言動の背景まで理解せずに額面通りに受け取ってしまうことで、最初から子どもとの間に心の壁を作ってしまう危険がある。第二に、音楽家として、あるいは人として求められる即興性である。音や音楽によるコミュニケーションが予定通りに進まない時に、常に違ったアプローチで対応できないと、子どもたちは音楽自体を嫌いになってしまう可能性さえある。向き合う子どもの興味や好奇心を引き出すための、即興的に曲を変容させたり、違う曲を採り入れたり、または計画と全く違う場所への旅と一緒に楽しむ心意気がないと、音楽家は単に自分のやりたいことを、やりたい方法で押し通して去っていった勝手な大人にしかたない。子どもたちが普段耳にする音楽や、学校で知った曲なども採り入れながら、音楽家自身が培った音楽性や技術を発揮するには、ジャンルを超えた多様な楽曲やそのスタイルを知っている必要がある。そして、こうしたスタイルの習得により、音楽家としても成長することができるということが、本研究でも実証できたと言える。

なお、こうして音楽家が子どもたちや音楽に集中できるのは、参与観察者の力による所も大きい。参与観察者は、演奏者が気付かない子どもたちの様子を、客観的な目で捉えることができる。毎回の詳細におよぶ記録は、WS の振り返り、分析や改善に繋げる上で不可欠だった。WS では部屋にいる全員が参加者として関わっていることが前提になるため、参与観察者は読み聞かせや子どもたちへの声掛け、WS の進行にも関わった。そのことで、子どもたちがより安心して WS に取り組むことができる環境を作ることができた。

### 3.3. 施設職員を対象にしたインタビュー調査

本活動の意義や課題を多角的に考察することを目的に、川崎愛児園施設長代理兼統括指導員の富居氏と同施設地域コーディネーター小田氏を対象にした半構造化インタビュー調査を行った。調査概要は表 6 に、調査内容の主要な部分は表 7 にまとめた。

「施設における本 WS の位置づけ及び意義について」聞いたところ、本 WS は、子どもたちに拒否感や心理的負担を与えない形で行われる自己表現の場と捉えられていることが確認できた。また、施設における集団生活の中、職員も多忙を極めていることから、そもそも子どもたちの自己表現の場は限られていること、また子どもたちのありのままの表現を受け入れてあげられるような安心感を与えることが難しい状況にあることが分かった。

表 6 インタビュー調査の概要

日時	2023 年 3 月 24 日（金）16:00-17:00
場所	川崎愛児園
対象	富居啓之氏（川崎愛児園施設長代理兼統括指導員） 小田浩子氏（川崎愛児園地域コーディネーター）
インタビューアー	伊志嶺絵里子、大島路子、大類朋美
目的	・施設における本 WS の位置づけ及び意義 ・外部の人材を受け入れる意義について ・外部の人材を受け入れる際に留意している点 ・外部の人材を受け入れる際の課題



表7 インタビュー調査の内容

質問事項	回答内容
施設における本WSの位置づけ及び意義について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活支援という枠組みの中で、子どもたちが音楽に触れられる機会は作れていない。音楽が好きな子どもは多いので、とても有り難い。</li> <li>・施設の集団生活の中において、子どもたちの自由な自己表現の場は限られており、ありのままの自分を出したものを受け止めてもらえるような安心感を与えることは難しい。現在15名の子どもたちを2~3名の職員が担当、職員は個々の業務に追われていることもあり、そもそも子どもたちの「あれがやりたい」「これ見て」といった欲求に対して対応できていない部分がある。</li> <li>・自由に自己表現してもよいと言っても、自信のない子や恥ずかしがり屋な子どもも多い。そういう子どもたちに無理に強要してしまうと、形だけ(の表現)になってしまう。子どもに負担をかけない、拒否感を感じさせない形をもっていけたらよい。そういう意味で、このワークショップは、何かを指導したり、強要したりしない形である。</li> </ul>
外部の人材(ボランティア)を受け入れる意義	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多様性を確保する上で重要。施設あるいは施設職員は決められた枠の中で動いているため、どうしても閉鎖的になり、価値観が凝り固まってくる。</li> <li>・現在、国の方針として地域の虐待防止対策に児童養護施設を活用していく方向にあり、今後ますます地域や地域の関係機関等と繋がっていく必要がある。</li> </ul>
外部の人材(ボランティア)を受け入れる際に留意している点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・継続性。やはり思い出話ができるくらい継続的に子どもの成長を見てくれることは、子ども自身も非常に喜ぶ。</li> <li>・子どもを地域で育てていくためにも、ボランティアの活動拠点として施設を利用して欲しいと考えている。</li> </ul>
外部の人材(ボランティア)を受け入れる際の課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・施設内で行われる活動については、基本的にボランティアと子どもたちだけで実施できる場合、職員はつかない形で行ってもらえると有難い。</li> <li>・担当職員に子どもたちの活動の様子を見て新たな側面を知って欲しいという気持ちもあるが、実際は職員も多くの業務を抱えており難しい。</li> </ul>

続いて「外部の人材(ボランティア)を受け入れる意義」については、施設及び施設職員の閉鎖的環境に多様な価値観をもたらすことや、「国の方針として虐待防止対策に児童養護施設を活用していく方向にあることから、地域や地域の関係機関等と日頃から連携しておく必要性がある」と述べている。一方で、児童養護施設の中には、「スタッフの体制が整備されていない、個人情報保護の観点から積極的になれない、施設職員と子どもとの関係性について理解が得られない(虐待を疑

われる)等の理由で、外部人材の受け入れに消極的な施設も多い」とのことだった。

「外部の人材(ボランティア)を受け入れる際に留意している点」については、活動の「継続性」を挙げている。子どもたちは、「出会いと別れにある意味慣れてしまっており、突然ボランティアの方が来なくなっても精神的に崩れることはない」とのことだが、やはり継続的に子どもの成長を見守ることは、特に児童養護施設におけるWSで重視されていることが確認できた。

最後に、「外部の人材(ボランティア)を受け入れる際の課題」についてだが、富居氏は「担当職員にも(W.S.中の)子どもたちの活動の様子を見て新たな側面を知って欲しいという気持ちはある」ものの、現状の人員体制では難しい側面があるとのことだった。児童養護施設の深刻な人手不足の実態は、様々な面において悪循環をもたらしていることが分かった。

#### 4. 考察

以上の①参与観察、②音楽家からの視点、③施設職員を対象にしたインタビュー調査結果を基に、本WSが児童養護施設入所児童に及ぼす影響及びそのために必要な創造活動の手順や手法と課題についてまとめる。

入所児童に及ぼす影響として、第一に、子どもが安心して自己表現できる場、すなわちありのままの自分を受け止めてもらえる場を創出できる点が挙げられる。ただし、その場を創出するにあたり、個別の関係性や即興演奏を活用する等の失敗のない受容的な雰囲気づくり、子どもたちの自主性や主体性を尊重する等の配慮が必要になることもある。小学校等で実施するアウトリーチとは異なり、児童養護施設は居住施設でもあることから、子どもたちの素の部分が出やすい。そのような子どもたちのありのままの表現を丁寧を受け止め、言葉にして反応(共感)することもまた重要になる。更に、子どもと音楽家との間に「教える/教えられる」という垂直な関係ではなく、水平な関係性を築くことは、子どもの自己表現を引き出す環境づくりとして重要になる。

第二に、施設職員も気付かないような個性やセンスの発見に繋がる点である。施設職員は人員不足の中で多くの業務を抱えていることから、WS中の子どもに継続的に付き添うことは難しいが、終了後に互いに情報を共有し合う時間を持ち、子どもの様子を伝えていく必要がある。

第三に、集団で行うアクティビティは、他者と時間を共有することで得られる相互作用によって子どもたちの意欲や自信を引き出すことができるという点である。ただし、集団の中で参加を



強要しないような WS デザインや、いかに心理的安全性を担保するかといった工夫が求められる。例えば、子どもたちが自発的に奏でた音やリクエストしてきた音楽を基点に演奏（即興演奏）に繋げるアクティビティは有効な手法の一つになる。音楽のもつ多様性や即興演奏がもつ柔軟性は、失敗を恐れる子どもたちに、心理的安全性を与えることができ、ひいては子どもの意欲や自信の創出に繋がる。

一方、本 WS が児童養護施設全体にもたらす影響として、施設に多様な価値観をもたらすこと、また職員側に子どもたちの新たな一面を知ってもらう機会になる点が挙げられるだろう。子どもの日々の生活を支援する場として、このような点も、間接的にはあるが児童養護施設入所児童に影響してることが推察できる。

最後に課題として、児童養護施設の中には、外部の人材の受け入れに消極的な施設も多い点が挙げられる。まずは音楽家側が、活動の意義をきちんと言語化し伝えられること、そして児童養護施設の子どもたちや施設職員の現状についても理解しておく必要がある。

更に、心理士等の資格を持たない音楽家が児童養護施設で活動を行う際は、子どもたちの養護発生理由や障がいの有無等の情報が開示されないことから、WS を始めた当初は戸惑う場面も多い。子どもの個性を理解する上でも、施設職員と情報を共有し合うこと、そして何よりも活動の継続性が求められている。

本研究は、川崎愛児園における即興演奏を活用した WS が入所児童に与える影響及びそのために必要な創造活動の手順や手法を考察した。一方、児童養護施設で実施する WS の長期的な効果を計測することは難しい。言うまでもなく、子どもの変容には、成長段階における変化であったり、学校生活や施設での生活を通じた様々な要因が関与している可能性がある。しかし、本活動で観察された子どもたちの小さな変化は、音楽及び即興演奏が有している開放性や受容的な関わりによって子どもたちにもたらされた何らかの肯定的な変化と推察できる。今後は、音楽およびそのファシリテーションの貢献要因について更に考察を深め、若手音楽家が持続的に関われる環境作りをしていきたい。

※本調査は、桐朋学園大学の研究倫理委員会による審査の承認を受けて実施している。

## 謝辞

インタビュー調査にご協力頂きました川崎愛児園の富居啓之氏（川崎愛児園施設長代理兼統括指導員）、小田浩子氏（川崎愛児園地域コーディネーター）、またフィードバックにご協力頂きました施設職員の皆様に心より感謝申し上げます。

そして、本研究の遂行にあたり多大なるご支援をいただきました公益財団法人マツダ財団の皆様に心から感謝の意を表します。

また本研究の実践および研究報告作成にあたり、参与観察者の伊志嶺絵里子（東京藝術大学、静岡文化芸術大学、慶應義塾大学）およびリトルクラシック in Kawasaki 主宰の大類朋美（国立音楽大学、洗足学園音楽大学）の両氏には、常に共に考察を深め、それぞれの専門研究分野に基づく知見を活かした助言を頂きました。実践を通して得たアイデアを、創意工夫をもって応用することにより本研究に新たな層を加え、この先の研究への道筋を示して下さいましたお二人にも、厚く感謝申し上げます。

## 発表論文・学会発表

- ① 伊志嶺絵里子・大島路子「児童養護施設における即興音楽を取り入れたワークショップの活動報告」日本音楽芸術マネジメント学会第15回冬の研究大会(武蔵野音楽大学)、2023年3月(口頭発表)。
- ② 大島路子・伊志嶺絵里子(2024)「児童養護施設における即興演奏を取り入れた音楽ワークショップの意義と課題—川崎愛児園を事例に」『音楽芸術マネジメント』15、(印刷中)
- ③ 伊志嶺絵里子「児童養護施設における共創型音楽ワークショップの活動報告②—子どもの情動の変化に着目して」日本音楽芸術マネジメント学会第16回冬の研究大会(昭和音楽大学)、2024年2月(口頭発表)。

### i リトルクラシック in Kawasaki の概要

団体名	リトルクラシック in Kawasaki (任意団体)
代表者氏名	大類朋美
設立	2004年4月
所在地	神奈川県川崎市多摩区
主たる活動内容	教育・福祉施設などでのコンサート、ワークショップなど 年間約40公演
構成員	7名
団体 URL	<a href="http://littleclassic.jp">http://littleclassic.jp</a>

ii 本調査の「虐待」数は、「放任・怠だ」「虐待・酷使」「棄児」「養育拒否」の件数の合計である。

iii 2023年6月16日社会福祉法人川崎愛児園主催研修会配布資料「社会福祉施設と地域のつながり方」から引用。

iv 地域コーディネーターへのヒアリング調査による(2023年3月24日(金)16:00-17:00実施)。

v 心理社会的問題をもつ子どものスクリーニングを目的とした質問紙である Pediatric Symptom Checklist (PSC) は、米国の Massachusetts General Hospital の精神科医である Jellinek らにより開発、現在世界中で使用されている。PSC 日本語版は、石崎優子・深井善光・小林陽之助によって作成された。質問紙は、子どもの学校生活、友人関係、遊び等の日常生活全般に関する35項目からなり、カットオフ値は17点、合計点が17点以上の場合、スクリーニング陽性、すなわち心理社会的問題ありと判断する(石崎優子・深井善光・小林陽之助2002)。PSC は子どもの保護者が記入することを想定して設計されているが、本活動においては、児童養護施設における子どもの担当職員に回答してもらった。

## 参考文献

- Eric Booth 「Making Change – Teaching Artist and Their Role in Shaping a Better World」 Betteryet Press、2023年
- 藤井達矢「アーティストのいる児童養護施設 I」『武庫川女子大学学校教育センター年報』3: 61-70、2018年。
- 石崎優子・深井善光・小林陽之助「Pediatric Symptom Checklist 日本語版の小・中学校および教育相談所における有用性の検討」『子どもの心とからだ』10: 119-127、2002年。
- 児童福祉法(2020年6月10日法律第41号)。
- 厚生労働省「児童養護施設入所児童等調査の概要(2018年2月1日現在)」2020年1月。
- 松原由美「児童養護施設における被虐待児への音楽療法導入の意義と可能性—全国児童 養護施設へのアンケート調査から—」『全国大学音楽教育学会』28: 11-20、2017年3月。

長津結一郎、中山博晶、松井志穂「演劇ワークショップの社会的包摂的側面への期待とその実際 特別支援学級における演劇ワークショップを事例に」九州大学大学院芸術工学研究院『芸術工学研究』29: 21-31、2018年10月。

長津結一郎『舞台の上の障害者—境界から生まれる表現—』福岡:九州大学出版会、2018年3月。

西澤哲「虐待の心理的影響と子どもの心理療法」『小児の精神と神経』37(2): 137-143、1997年。

NPO 法人芸術家と子どもたち

—「児童養護施設等における被虐待児や障害児へのアートを通じた自立支援活動～アーティスト・ワークショップの記録・事業紹介～」、2016年9月。

—「児童養護施設のこれからを考えよう～アーティスト・ワークショップの実践から～」2018年3月。

—「にじいろのなかまたち～ふたつの児童養護施設の交流ワークショップの記録～」、2020年3月。

—「アートがつなぐ育ちの場～児童養護施設、こども食堂、ファミリーホームの交流ワークショップ3年間の記録～」、2021年3月。

東京藝術大学 Diversity on the Arts プロジェクト(編)『ケアとアートの教室』、東京:左右社、2022年2月。

若松亜希子「児童養護施設における心理職の活動」『子どもの虐待とネグレクト』25(1): 26-31、2023年。

吉本光宏「アートが拓く超高齢社会の可能性—高齢者の潜在力を引き出すアートのポテンシャル」『ジェロントロジージャーナル』11-009: 1-15、2012年3月。

大島路子・伊志嶺絵里子(2024)「児童養護施設における即興演奏を取り入れた音楽ワークショップの意義と課題—川崎愛児園を事例に」『音楽芸術マネジメント』15、(印刷中)

## ウェブサイト

こども家庭庁「こども基本法」

<https://www.cfa.go.jp/policies/kodomo-kihon/> (最終閲覧日: 2023年10月15日)。

こども家庭庁支援局家庭福祉課「社会的養育の推進に向けて」[https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic\\_page/field\\_ref\\_resources/8aba23f3-abb8-4f95-8202-f0fd487f9bd1e/20230401\\_policies\\_shakaiteki-yougo\\_67.pdf](https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/8aba23f3-abb8-4f95-8202-f0fd487f9bd1e/20230401_policies_shakaiteki-yougo_67.pdf) (最終閲覧日: 2023年10月15日)。

こども家庭庁「社会的養育の施設等について」<https://www.cfa.go.jp/policies/shakaiteki-yougo/shisetsu-gaiyou/> (最終閲覧日: 2023年10月15日)。